

II. 「宇宙文化学」連携講義成果—学生レポート実例集—

特撮作品から見る国際的宇宙組織像

神戸大学3年 辰見航平

今日、宇宙事業は目覚ましい発展をみせている。宇宙に進出することは人類の夢であり、そこで得られる様々な発見は人類の繁栄に多大に貢献するだろう。では、我々が宇宙に進出することは、宇宙全体にとって利益と言えるのであろうか。我々人類は山を切り開き、ビルを建て、地球を開発することで自らの文明を発展させてきた。それは地球の環境や自然を犠牲にした、乱暴な発展である。そして今日、宇宙という広大なフロンティアに足を踏み入れた我々がすべきことは、かつてのような夢と希望を盲信した野蛮な開発競争なのだろうか。

火星への無帰還移住計画「Mars One Project」が注目を集めている。オランダのNPO団体が立ち上げたこの計画は、片道という無謀ともいえる内容もちろんのことながら、政府ではなく民間による宇宙開発の第一歩であるとして、世界中で取り上げられている。当然そのどれもがこの計画を支援するものではなく、様々な問題点が指摘されている。そもそも火星で人間が暮らしていく設備も不十分なまま火星に行くことに意義があるのか、ただの自殺行為ではないかという声も珍しくない。だが私が考えるこの計画の問題点はそこではない。火星に移住するという夢のために命をかけるというのは個人の自由であり、人間のもつロマンチズムは止めることのできないものである。ここで考慮すべきなのは火星に移住する我々の問題ではなく、移住される火星側の問題である。火星に生物が存在するかどうかは現在も謎のままであるが、もし存在した場合そうした惑星に我々が移住することはれっきとした侵略行為に他ならない。また、火星の環境の保存も重要な問題である。火星に地球の物を持ち込むことが火星の環境にどのような影響を及ぼすかも不明確であり、またもし火星で大規模な事故が起こった場合、もはや地球の人間がどのように責任をとったところで取り返しのつかない深刻な事態になってしまうのである。

では、こうした民間、あるいは国家の宇宙開発事業に対して、どのような規制がおこなわれているのであろうか。1984年に発効した「月その他の天体における国家活動を律する協定」の第7条部分では、「締約国は、月の探査及び利用を行う上で、月の環境の悪化をもたらすことによる又は環境外物質の持ち込みによる月の有害な汚染による又はその他の方法によるを問わず月の環境の既存の均衡の破壊を防止する措置をとるものとする。締約国はまた、地球外物質の持ち込みその他の方法による地球の環境への有害な影響を防止する措置をとるものとする。」とされ、明確に月その他の天体の環境維持について言及されている。しかしながらこの月協定は、締約国が少なく主要な国々が参加していないため実質的な効果は薄いとされている。また、1967年に発効した『月その他の天体を含む宇宙空間の探査および利用における国家活動を律する原則に関する条約』によると、条約の当事国が宇宙空間における自国の

政府機関および非政府団体の活動について国際的責任を有するとしている。これは大きなリスクが伴う宇宙事業において、その活動をそれぞれの政府に監督・管理させることを目的とした物である。これに対して各国は、国内法をさだめる、免許制度を敷く、保険の購入を義務づけるといった対応を行っている。しかしながら、限られた予算の中で政府の負担を軽減することや、商業化による経済効果・産業競争の観点から、各国はおおむね民間の宇宙開発を奨励する傾向にある。米国の国内法を見ても、リスクの高い未実証の技術を使用した宇宙ビジネスを禁止するのではなく、参加者の同意をとり、政府の責任を限定化し、あくまで自己責任として許可する方針である。

このように、宇宙旅行が実現され、民間による宇宙開発が行われるなかで、政府はそれを自己責任として容認する傾向にある。それは言い換えるならば、「Mars One Project」のような大胆な宇宙開発計画を止める手だてがない、ということである。厳格に宇宙開発を管理するには、宇宙法の強化、国際協力、さらにいえばもっと力をもった国際組織が必要となる。そこで私は大きな権力をもつ宇宙開発国際組織の形を探るために、日本を代表する特撮作品である『ウルトラマン』シリーズにおける対怪獣、対宇宙人組織について考察した。

1966年の『ウルトラマン』から2007年の『ウルトラギャラクシー大怪獣バトル』のうち、明確に宇宙開発の国際組織が存在する21作品を今回の調査の対象とした。詳細は別途資料の地球防衛組織の一覧に記載する。今回の調査で着目したいのはその組織がどのように結成されているかということ、どのように運営されているかということ、外部に対してどのような力をもっているかということ、またそれらが時代とともに同シリーズの作品内でどのように変化したかである。また、これらの作品のなかで、『ザ☆ウルトラマン』『ウルトラマンパワード』はアメリカと共同制作した作品、『ウルトラマンG』は全編オーストラリアで作成されたものであり、日本という舞台を飛び出したこれらの作品にはどのような特徴があるのかも見ていく必要がある。

はじめに、これらの組織がどのように結成され、どのように運営されているかを見ていく。全組織のうち、明確に国連の主導によって組織されていることが描写されているものが6件、独立した組織であるものが15件であった。また、初期の2作品は直接的には言及していないものの、その本部がパリにあることから国連をベースとした組織であることが伺える。これらの作品を時系列にみていくと、初期の作品には国連を主体とした組織が多いのに対し、作品が時代を経るにつれて防衛隊を管理する組織がより多様化していることがわかるだろう。特に平成に入ってから作品は国際組織に関する描写が細くなされており、『ウルトラマンティガ』『ウルトラマンダイナ』ではチームの上部組織であるTPCが作品内でたびたび登場するようになっている。また注目したいのが2001年の作品『ウルトラマンコスモス』の登場するTEAM EYESである。この組織は、私設ボランティア団体である水無月工業技術研究所から発足したものであり、Mars Oneのような私設NPO団体が宇宙の管理を行う可能性も視野にいれられていることがわかる。また、この組織は怪獣の保護をその目的としてあげているように、従来の組織と違い環境保護や生態系維持を念頭においている。これは時代の流れによっ

て生まれた宇宙の環境保護という理念を反映したものだと考えられる。また、他の組織が地球の防衛や怪事件の解決を目的としているのに対し、2007年の作品である『ウルトラギャラクシー大怪獣バトル』の登場するZAP SPACYは、宇宙開拓にともなう危険な任務を行うことを目的としている。テラフォーミング施設やシリーズ最多の宇宙船を保有しているなど、従来の組織とは明らかに毛色の違ったものになっており、ここからも宇宙技術の発展によって宇宙開発が現実のものとなっていく時代の流れと、それによる宇宙に対する価値観の変化が伺える。現在、国連には国際連合宇宙局が存在しているが、この組織は宇宙条約の管理を目的とした物であり、その力は条約の締結国、範囲内にとどまっている。また、COPUSではスペースデブリなどの宇宙空間における環境問題も議題にあがっているものの、上記の通り宇宙活動の責任はあくまでその国家に所在し、国の枠を超えて宇宙をとりしめる機関は存在しない。ここで見たような、国連から独立した国際組織やNPO団体による宇宙の取り締まりは、宇宙の乱暴な利用を抑止するために検討されるべきではないだろうか。

次に、作品内に登場する組織がどういった機関と連携し、活動しているのかを見ていく。国連主体の組織の特徴として、軍との綿密な連携があげられる。作品内においても軍と連絡をとりあう描写がみてとれる。これらの組織は軍に匹敵する、もしくはそれを超えるような軍事力をもっていることから、紛争の不介入を掲げているものもある。それに対して独立した組織は、軍との対立やなわばり争いが行われており、国連から独立した組織が軍事力をもつことの難しさが描写されている。また、独立した組織には多種多様な運営方法が模索されている。ほぼすべての組織が宇宙ステーションを所持しているなかで、『ウルトラマンレオ』に登場するMACは、本部自体を上空宇宙ステーションにおいている。これは地球の防衛のほかに、宇宙船の安全な航行を目的とした組織でもあるためである。上空に本部をおくことで地上とは隔絶された、あくまで宇宙に拠点を置く組織として活動することが可能となる。また平成に入ってから作品では、多種多様な組織との連携が描写されている。1995年の作品『ウルトラマンネオス』の登場するHEARTは、宇宙開発事業団や国際先端科学機構のほかに、シリーズ作品の中で初めて世界環境保護連盟との連携が描写されている。この設定は1996年の『ウルトラマンゼアス』に登場するMYDOにも引き継がれており、人類の防衛だけでなく環境を守ることも目的とする組織像が描かれている。これ以降の作品では、環境保護連盟と協力するのではなく、組織の中に環境保護組織が組み込まれるようになっていく。ここから、時代が進むにしたがって、環境保護が宇宙の管理において重要な位置づけをされていく様子が読み取れる。

最後に、海外で作成された作品における組織の特徴を見ていく。『ウルトラマンG』『ウルトラマンパワード』はそれぞれアメリカ、オーストラリアで製作されたものであるが、この作品に登場する組織に共通する設定として、各国からの募金、基金によって運営されていることが挙げられる。これは日本で作成された作品にはない、実質的な運営予算を考慮した設定である。宇宙開発には必ず予算の問題がつかまとう。また、『ウルトラマンG』に登場するUMAにはUMA憲章というものが存在し、軍事紛争の不介入や軍に対する命令の拒否権などそ

の活動がこまかく定められている。こうした現実を加味した設定は、海外ならではといえるだろう。

これらの作品はあくまでフィクションであるが、現実の宇宙共同管理組織の姿を想起する上で、また人々の宇宙観をつかむうえで大きなヒントとなる。今回調査したのはほとんどが日本の、さらにいえば子供向けにつくられた特撮作品である。世界中にはさまざまなSF作品が存在しており、国ごと、時代ごとに宇宙管理の描写は多種多用である。宇宙旅行や宇宙ステーションが現実のものとなったいま、もう一度こうした作品から、我々が宇宙に対してどのような態度で臨むのか、検討してみる価値がある。

参考文献・参考 URL

- 内富素子 (2006) 「宇宙旅行ビジネス時代の到来と法的対応」 日本空法学会編『空法』
p. 5181-5212 [講義資料]
- デアゴスティーニ・ジャパン編 (2009) 『週刊ウルトラマンオフィシャルデータファイル』
デアゴスティーニ・ジャパン社
- CNN. co. jp 「火星への片道切符、申し込みは7万8千人以上」 2013. 05. 11
<http://www.cnn.co.jp/fringe/35031924.html?ref=rss> (最終閲覧 2013/8/2)
- JAXA 「寄付金」 <http://www.jaxa.jp/about/donations/>
- JAXA 「月その他の天体における国家活動を律する協定」
http://www.jaxa.jp/library/space_law/chapter_2/2-2-2-20_j.html
- JAXA 「原典宇宙法」 http://www.jaxa.jp/library/space_law/index.html
(最終閲覧 2013/8/3)
- Wikipedia ウルトラシリーズ <http://ja.wikipedia.org/wiki/ウルトラシリーズ>
(最終閲覧日 2013/7/23)
- 外務省 「外交政策 国連宇宙空間平和利用委員会 (COPUOS) について」 2013年7月25日
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/technology/universe/copuos.html>
(最終閲覧 2013/8/2)
- 東京地球防衛軍 <http://www14.big.or.jp/~hosoya/ttdf/index.htm>
(最終閲覧日 2013/8/1)

地球防衛組織の一覧

制作	部隊名	目的	運営、上部組織	本部所在地	外部施設、連携	その他	登場作品名
1966	科学特捜隊	怪事件、怪現象に対処	国際科学警察機構	パリ	防衛隊、科学センター		ウルトラマン
1967	ウルトラ警備隊	宇宙人による怪事件の調査解決	TDF(Terrestrial Defense Force 地球防衛軍)	パリ	宇宙ステーションV3		ウルトラセブン
1971	MAT(Monster Attack Team)	怪事件を解決	国際連合機構地球防衛組織	ニューヨーク	MATステーション、ステーションNo.5		帰ってきたウルトラマン
1972	TAC(Terrible-Monster Attacking Crew)	超獣の殲滅	TACニューヨーク本部	ニューヨーク、南太平洋海上に国際本部	ステーションNo.5	超獣により消滅した地球防衛軍に代わり設立	ウルトラマンA
1973	ZAT(Zariba of All Territory)	あらゆる外敵から地球を防衛	国際連合	ニューヨーク	有人宇宙ステーションV9		ウルトラマンタロウ
1974	MAC(Monster Attacking Crew)	宇宙船の安全な航行、および侵略者からの地球の防衛	MAC最高司令部	上空宇宙ステーション			ウルトラマンレオ
1979	科学警備隊	地球防衛、宇宙開発、地球各地の観測	地球防衛軍	各ゾーン(極東、北アメリカ、南アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ)	地球防衛軍各班との連携		ザ☆ウルトラマン
1980	UGM(Utility Government Members)	怪獣、超常現象による事件に対処	国際連合、UNDA(United Nations Defence Army 地球防衛軍)	ニューヨーク(国連直轄のため)	地球防衛軍内のその他の組織と連携		ウルトラマン80
1990	UMA	怪現象、超常現象に対処	UMAセントラル	アメリカ	オーストラリア軍とは対立	UMA憲章が存在し、軍の指示から独立。各国からの募金、基金により活動	ウルトラマンG
1993	W.I.N.R	怪現象の調査、解決	国際連合	不明	軍とは協調関係だが、紛争には不介入	各国からの募金により運営	ウルトラマンパワード
1994	ウルトラ警備隊	宇宙人による怪事件の調査解決	TDF(Terrestrial Defense Force 地球防衛軍)	パリ	宇宙ステーションV3	地球侵略の恐れがある惑星に先制攻撃を仕掛ける計画を推進	ウルトラセブン(ビデオ版)
1995	HEART(High-tech Earth Alert and Rescue Team)	怪現象の調査、解決	国際防衛機構 DJ(Difence Jurisdiction)、内閣総理大臣	日本	国連、宇宙開発事業団、国際先端科学機構、世界環境保護連盟の支援、内閣情報局の指令により活動	宇宙施設を多数所持	ウルトラマンネオス
1996	MYDO(Mysterious Yonder Defence Organization)	怪事件の調査、解決	地球防衛連盟、国際防衛軍	アジア(詳細は不明)	国際環境保護連盟、宇宙開発連盟	地球上の他、ISSをはじめ月や太陽系の他の惑星にも支部をおく。また、この世界の人類同士の紛争は根絶されている	ウルトラマンゼアス
1996	GUTS(Global Unlimited Task Squad)	怪事件の解決	地球平和連合 TPC(Terrastral Peaceable Consortium)	日本	宇宙開発センター、海洋開発センターなど、複数の傘下の組織を所持	火星、木星基地、複数の宇宙ステーションを所持	ウルトラマンティガ
1997	スーパーGUTS	人類の住むすべてのエリア(ネオフロンティア)の平和	同上	同上	同上	同上	ウルトラマンダイナ
1998	XIG(Expanded Interceptive Guardians)	根源的破滅招来体に対処	国際連合、G.U.A.R.D.	ニューヨーク	アルケミー・スターズ		ウルトラマンガイア
2001	TEAM EYES(Elite Young Expert Squadron)	怪現象の調査、怪獣の保護	SRC(Scientific Research Circle)、水無月工業技術研究所	日本	国連の認証、鎗矢諸島に怪獣保護区域を所持	元は私設ボランティア研究団体、防衛軍と違い、一般に開放された存在。統合防衛軍とたびたび対立。	ウルトラマンコスモス
2004	ナイトライダー	異星獣から地球を防衛	TLT(Terrestrial Liberation Trust)	北米		極秘機関で、遭遇した一般人の記憶を削除	ウルトラマンネクサス
2005	DASH(Defence Action Squad Heros)	地球の防衛	国連、UDF(United Defense Federation)	パリ	宇宙ステーション等	怪獣、宇宙人に関する事件では警察、軍に対し優越権をもつ	ウルトラマンマックス
2006	GUYS(Guards for Utility Situation)	あらゆる状況に対する防衛	GUYSインターナショナル	ニューヨーク	セクションごとに広大な施設	今までの防衛隊が遭遇した怪獣・宇宙人のデータを所持	ウルトラマンメビウス
2007	ZAP(Zata Astronomical Pioneers) SPACY	宇宙開拓に関する危険な任務を行う	宇宙局総合本部	地球	多数の宇宙船、開拓した惑星にテラフォーミング施設を所持		ウルトラギャラクシー大怪獣バトル